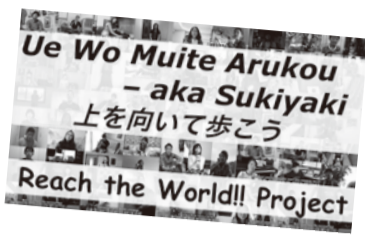




Reach the World!! Project 世界に届け!! プロジェクト

協力隊員が18言語の「上を向いて歩こう」で世界にエール



5月12日、NHKニュース等で協力隊員たちが現地語で歌う『上を向いて歩こう』の動画が紹介され、大きな反響を呼んだ。

「世界に届け!!プロジェクト」と名付けられた動画配信を企画したのは、今年3月にタンザニアから帰国した岡本龍太さん（2017年度4次隊/コミュニティ開発）。

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を受け、医療体制が整っていない開発途上国で活動していた約1,800名の隊員たちは、やむなく活動を中断して帰国。多くの隊員たちは「自分たちに今できることは何か」「何とかみんなを元

気づけたい」という思いを抱いており、岡本さんの呼び掛けにより、76名の隊員が参加して『上を向いて歩こう』『スタンド・バイ・ミー』の二曲を配信することになった。

「一緒に笑った、泣いた、あの人たち。あなたの言葉をまだ自分は忘れていない」というメッセージを込めて、スワヒリ語、アラビア語、ネパール語等、18の言語で歌われた動画の視聴回数はすでに1万回を超えており、「時代が変わっても、協力隊は変わっていない」「同じ日本人として誇りに思う」などのコメントも多数寄せられている。

<https://www.youtube.com/watch?v=daq1oKPhTn8&feature=youtu.be>

笑顔で再開できる日を信じています

岡田 果奈子さん（2019年度1次隊/障害児・者支援/ベリーズ）

新型コロナウイルスの感染拡大をうけた一時帰国となってから2か月が経ちます。派遣されてから半年、生活に慣れて「さてこれから」というところでの帰国は、正直無念でなりません。しかし、少し時間が経った今だからこそ見えてきたこと、感じることもあります。

一時帰国をするとき、現地事務所の所長さんから「きっとこれから世界が変わっていく。少し客観的な視点ももってしっかり見ていきましょう」とお話をいただきました。今、まさに、世界の様子が変わり始めていることを肌で感じています。これからどんどん予測不可能な社会になっていくんだろうなと思いつつ、一方で、ベリーズで感じたコミュニケーションの豊かさというか、人の本質的な部分が変わらないであってほしいという願いもあります。



帰国直前に行った、自作の手洗いソングで練習するベリーズの子供たち

必ずしもマイナスな変化だけではないと感じたことのひとつに、環境問題があります。帰国する日の朝に見たベリーズの海は、気持ちのバイアスもあるとは思いますが、皮肉にも今までで一番きれいに見えました。空港のあるベリーズシティは、ベリーズで最も大きな都市で人口も一番です。そのためか、他の海沿いの町に比べると、普段見る海はここまできれいではありませんでした。訓練所で知り合った同期隊員からは「今インドネシア人から送られてきた首都の写真が、いつも排気ガスでスモッグがかかっていたところと同じとは信じられないほどの青空だ」と聞きました。普段、地球全体の環境のこ

とは見えづらいですが、数か月経済活動が停滞するだけでもこんなにも変わるのかと驚きつつ、教育に携わる者として、このことを伝えていかなければならないと感じています。明確な正解のない今、柔軟に変化しながらトライアンドエラーでアクションをしていくことが求められていると感じています。協力隊の活動は本来草の根ベースのものですが、今は幸いオンラインで任国の人とつながることができる時代、他の隊員から新しいやり方もあるのだと気付かされるのがたくさんあります。スポーツ界では、SNSで「〇〇を止めるな2020プロジェクト」というのが流行っているようですが、私もできることを模索し、流れを止めないよう何かトライしていきたいと思っています。みんな無事で、またいつか笑顔で集まれる日がやってくることを願っています。

愛知

おめでとうございます 春の叙勲

【瑞宝双光章】

武藤 一郎さん

愛知県青年海外協力隊を支援する会副会長
(昭和44年度3次隊/畜産加工/タンザニア)

武藤さんは1970年、大学卒業と同時に協力隊員としてタンザニアに赴任、任期延長を続け日本に帰国したのは1981年、11年間タンザニアで活動を続けました。帰国後は外務省の職員として活躍、定年退職後は愛知県青年海外協力隊を支援する会、一般社団法人アフリカ協会などでこれまでの経験を活かし国際協力の理解と支援に取り組んでいます。

千葉県出身。流山市の特別支援学校勤務の後、現職教員特別参加制度で2019年9月よりベリーズに赴任するも、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて2020年3月に一時帰国。現在日本にて待機中。

と見えてくることを願っています。

みんな無事で、またいつか笑顔で集まれる日がやってくることを願っています。

.....

「JICA 海外協力隊の世界日記」の岡田さんのブログ「ちがうっておもしろい!わたしのBelize Life」をもとにいただいた手記です。ぜひこちらもご覧ください。(下、左記事参照)

隊員たちの想い、聞いてください JICA 海外協力隊の世界日記

JICA 海外協力隊のオフィシャルブログでは、「JICA 海外協力隊の世界日記」と題して、隊員たちの日常を日記形式で紹介しています。

自己紹介、赴任直後の戸惑い、次第に馴染んでいく現地の食事や習慣、そして、今回の新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、突然日本に帰国せざるを得なかった悔しい想い、そんな隊員たちの様々な想いが綴られています。

一時帰国してすでに2か月が経過、徐々に生活も落ち着き始め、隊員たちも自分なりにできることを探し始めています。再赴任に向けて語学の勉強等に勤しむ方、遠く離れた任国に向けてオンライン授業の取り組みを始めた方たちもいます。

隊員たちの想いと新たな挑戦をぜひ見守ってあげてください。

<https://world-diary.jica.go.jp/>

一時帰国中の隊員がキャベツ農家を支援

群馬

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて現在約1,800名の隊員が日本に一時帰国しているが、群馬県では人手不足に苦しむキャベツ農家を隊員が支援することになった。

群馬県嬭恋村は夏秋キャベツ出荷量日本一を誇るが、夏秋の最盛期を控え、外国人技能実習生が入国できず苦境に立たされていた。こうした状況を受けて、同県甘楽町に拠点を置くNPO法人自然塾寺子屋(代表:矢島亮一、協力隊OB)とJICA東京が連携し、一時帰国中の隊員をキャベツ農家の元への派遣する「嬭キャベツ海外協力隊プロジェクト」が実現、すでに5名が活動を始めている。

このプロジェクトは、労働力の提供に加え、農家等からの聞き取りを行い、農作業を行いながら村の魅力発信や外国人実習生との関係構

築等について共に考えていくもの。県外移動が制限される中での試みのため、まずは群馬県在住の隊員でスタートし、6月から7月にかけて県外在住の隊員20名程度の派遣を予定、今後他の自治体等にも活用すべく、パイロット事業としても注目されている。



農家の方(中央)から教わりながら、キャベツの植え付けを行う一時帰国中の隊員(両端)(写真提供: NPO法人自然塾寺子屋)